

## 「アジア的」、「好戦的」、「男性的」なナチズム

### — 「歴史家論争」の再検討<sup>1)</sup> —

渡辺 将尚

#### 序

「歴史家論争」(1986年)から30年以上が経過した。ナチズムの比較可能性や一回性をめぐって、歴史学者など知識人たちが新聞紙上を主たる舞台として議論を闘わせた本論争については、これまでさまざまな研究が試みられているが、その関心は主に、各論者の思想的立場を明らかにすることに向けられてきたと言える。<sup>2)</sup> その際着目されたのは「アイデンティティ」である。もはや論争当事者でない研究者たちは、当時の論者たちの自己理解の方法を読み解きながら、彼らを思想的・時代的にいかに位置づけるかに関心を寄せてきたのである。それらの研究は、当然のことながら、論争当時の冷戦構造を強く念頭に置くことになる。こうした問題関心からたしかに多くの研究成果が生み出されたが、<sup>3)</sup> その反面、各論者の主張内容そのものについては詳

- 1) 本論文は、平成28年10月22日「日本独文学会2016年秋季研究発表会」(関西大学)での報告「ナチズムは<アジア的>行為か—歴史家論争30年、アジアからの再考の試み」をもとに、主張内容を新たに構築し直し、大幅に加筆修正を行ったものである。
- 2) ただし、論争と同時代か、再統一前までの時期の論考は、当然冷戦構造の中で両陣営の主張を見ており、過去との取り組みや共産主義の問題については自分自身も当事者であるため、執筆者自身の態度表明をも兼ねるものとなっていた。その好例として、Peter Borowsky: *Der Historikerstreit. Wie geht die deutsche Geschichtswissenschaft mit der nationalsozialistischen Vergangenheit um?* Hamburg (Hamburg University Press) 2005. S. 63-87. を挙げる事ができる。本書の出版年は2005年であるが、この論考のもとになっているのは1988年7月に行われた講演で、ハーバーマスに沿って、ノルテラの主張を歴史の政治利用として批判する内容となっている。また、Hans-Ulrich Wehler: *Entsorgung der deutschen Vergangenheit?* München (C.H. Beck) 1988. bes. S. 197f. にも同様のハーバーマス支持が見られる。
- 3) たとえば、Jürgen Peter: *Der Historikerstreit und die Suche nach einer nationalen Identität der achtziger Jahre.* Frankfurt am Main (Peter Lang) 1995. S. 39 を参照。本書はアイデンティティ問題に着目しつつ、ノルテラ修正主義者を登場させるに至った時代背景を詳細に論じている。同様の視点が見られるものとして、芝健介: *ホロコースト史叙述と「歴史家論争」再考* [東京女子大学読史会『史論』第65集, 2012, 特に39頁]。千葉美千子: *公共的記憶の再構築—ドイツの「歴史家論争」を手がかりとして—* [『多文化関係学』第10巻, 2013, 特に65頁]などを挙げる事ができる。しかしもちろん、歴史家論争研究が皆同じアプローチの仕方を取っているわけではなく、近年では、自らをどの陣営にも寄せることなく、歴史家論争自体がアポリアであり、そもそも歴史論争にすらなっていないと痛烈な批判を浴びせる論考も登場している (Nicolas Berg:

細な分析の対象とはされてこなかったように思われる。その結果、主張内容に関して問われるべき問題が、問われないうまになっているのではないだろうか。たとえば、ノルテは、ナチズムを過小評価していると非難されるが、なぜナチズムを過小評価する必要があるのだろうか。そもそも過小評価する目的は何なのだろうか。本稿の目的は、これまで考察されることのなかったそうした問題を、既存の枠組み——冷戦構造、「アイデンティティ」など——から切り離してあぶり出すことにある。

そのため以下ではまず、ノルテが用いる「〈アジア的〉所業 (eine „asia-tische“ Tat)」という語に注目する。なぜなら、この語の使用法こそ、これまで用いられてきた枠組みでは理解することのできないノルテの主張のもうひとつの意図を暗示し、なおかつナチズムの過小評価を導いているものであるからである。少し結論を先取りしてしまえば、それは、論争当時の世界における西独の位置づけに対する異議申し立てである。ハーバーマスは、ノルテを、共産主義を持ち出すことによってナチズムを過小評価しようとしているとし、彼を「NATO 哲学」<sup>4)</sup>と非難するが、そうした見方はノルテの思考の一側面を突くものではあっても、<sup>5)</sup>彼の主張すべてを捉えるものではない。たしかに、確たる証拠がないまま、ナチズムを近代経済へ反旗を翻す一連の活動の系譜に位置づけようとする——したがって、それは自動的にほぼ共産主義の系譜と重なる——ノルテの論は、到底受け入れられるものではない。しかし、彼を NATO の御用学者の枠に当てはめると、西独の現状に対する彼の疑義が見逃され、その結果、彼の論の何が問題であるかについても、正確な判断を失うことになる。すでに述べたように、現状への疑念はナチズムの過小評価と表裏一体をなすものであり、他の問題ある主張とともに一刀のもとに切り捨ててしまうことはできない。

ノルテの論の問題は、西独の現状への異議申し立てを絶えず内に抱えながら、それをナチズムというオブジェクトに包み込み、ナチズムをいかに理解するかということこそがあたかも大問題であるかのような外観を呈している点にこそある。次章以降、こうした問題意識のもと、ノルテの主張を詳しく見

„Zwischen den Zeiten“ (1947) — Ein Blick voraus auf die Aporien des „Historikerstreits“. In: „Doppelte Vergangenheitsbewältigung“ und die Singularität des Holocaust. Saarbrücken (Universitätsverlag des Saarlandes) 2012. S. 15-42).

- 4) Jürgen Habermas: Eine Art Schadenabwicklung. In: „Historikerstreit“. Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung. München (Piper) 1987. S. 75.
- 5) 後に詳しく見るように、ノルテに「NATO 哲学」と言える部分があり、それがナチズム擁護の一翼を担っていることは事実である。したがって、ハーバーマスの批判的射を射ており、本論では彼の批判の価値を疑問に付すわけではない。

ていくことにしよう。

## 1

1986年6月6日付けの『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に掲載された論説において、 Nolte は「アジア的」という語を以下のように用いている。

（前略）にもかかわらず、つぎのような問いは、許されるどころか、不可避なものであると思われる。ナチ、つまりヒトラーが<アジア的>所業を実行したのは、もしかしたら、自分たちおよびその仲間たちが、現在<アジア的>所業の餌食になっている、あるいは将来的にそうなると見なしていたから、というだけなのではないか。アウシュヴィッツより、<収容所群島>の方が先なのではなかったか。ボルシェヴィキの<階級抹殺>が、ナチの<民族抹殺>の理論的、実際的先駆ではなかったか…<sup>6)</sup>

Nolte によれば、ロシア革命は、ブルジョワジーという1つの「階級」をそっくりまとめて根絶するという、歴史上類を見ない大規模な抹殺行為であった。ナチによる民族抹殺は、そうした「アジア的」残虐行為を実行したボルシェヴィズムに対する単なる反応、ないしはその模倣であったのだと言う。ナチズムの過小評価を目論むこのような捉え方自体、重大な問題であることは言うまでもない。しかしこの主張は、それ以外に以下のような疑問を呼び起こす。まず第一に、ボルシェヴィズムだけでなく、なぜわざわざナチの行為まで「アジア的」と言う必要があるのだろうか。たしかにヒトラーも演説などにおいて「アジア的」という語を用いているが、その際の「アジア的」とは野蛮なものを意味し、だからこそ、ヒトラーは自らの行為に対して「アジア的」と言うことはなかった。<sup>7)</sup> 第二に、ナチズムを過小評価するなら、なぜそれを無害なものであったと主張しないのだろうか。ナチズムを野蛮なものと定義した上で、それは他から来たものであるという論理を取る意図は何なのだろうか。

6) Ernst Nolte: Vergangenheit, die nicht vergehen will. In: „Historikerstreit“, S. 45.

7) 1940年12月18日付けの「バルバロッサ作戦」に関する指令には以下のようにある。「ロシア西部に駐留する陸上部隊は…壊滅させ、戦闘能力を残してロシア奥地に撤退することを阻止する。その後、電撃的な追撃によって、ロシア空軍が帝国ドイツの領土を攻撃できない位置まで、前線を押し進める。この作戦の最終目的は、ヴォルガ川とアルハンゲリスクを結ぶラインから、アジア的ロシア (das asiatische Rußland) を排除することである。必要とあらば、残ったウラル山脈沿いの工業地帯を空爆によって破壊してもかまわない。」(Walther Hubatsch: Hitlers Weisungen für die Kriegführung 1939-1945. Erlangen (Karl Müller Verlag) 1999. S. 85. 下線は引用者による。)

ハーバーマスもこの語に反応している。論争の口火を切ったとも言える『ツァイト』紙の論説（『一種の損害補償』）において彼は Nolte を以下のように批判する。

彼の論は一石二鳥である。ナチの犯罪は、（今なお続く）ボルシェヴィズムによる根絶の脅威への反応として、少なくとも理解可能なものにされることによって、その特異性を失う。アウシュヴィッツは技術革新の度合いの問題へと縮小し、今なお我々の戸口に立っている〈アジア的〉脅威から説明される。<sup>8)</sup>

「今なお我々の戸口に立っている〈アジア的〉脅威」とは「共産主義」のことである。ハーバーマスは、Nolte の主張が、ナチズムを過小評価しつつ、なお NATO 加盟国として模範的発言をするという「一石二鳥」を目指した、まさに新保守主義のイデオログであると非難するのである。

## 2

たしかに、Nolte の思考の中には、確実に新保守主義的側面が存在する。<sup>9)</sup> 彼は、先の『フランクフルター・アルゲマイネ』の論説で、レーガン・アメリカ大統領のビットブルク軍人墓地訪問（1985年）に言及し、以下のように言う。

アメリカ大統領のビットブルク軍人墓地訪問は、たしかに大変感情的な議論を引き起こすに至ったが、この訪問が〈相殺〉であるとの非難（中

- 
- 8) Jürgen Habermas: Eine Art Schadenabwicklung. In: „Historikerstreit“. S. 71. 引用 1 行目の（ ）は原文のまま。
- 9) また、Nolte 自身も、ハーバーマスの言う「一石二鳥」（ナチズムの過小評価と NATO 支持）を目指しているものと理解していたようである。ハーバーマスらの批判に対して再反論を試みた1986年10月31日の『ツァイト』紙への寄稿の中で、Nolte は以下のように言っている。「ユルゲン・ハーバーマスとエーバーハルト・イエッケルの攻撃的な批判に対して、私は今何と言ったらよいだろうか。不快な造語〈想定屋〉や、ひと昔前の東ベルリンの〈歴史学雑誌〉を思い起こさせるような〈NATO 哲学〉といった用語については、私は何も言わない。」(Ernst Nolte: Die Sache auf den Kopf gestellt. Gegen den negativen Nationalismus in der Geschichtsbetrachtung. In: „Historikerstreit“. S. 229.) 「想定屋 (Untersteller)」とは、イエッケルの用語で、彼はこの言葉でもって、確証がない、あるいは証明のできない事柄を単なる「想定」でもって語っているとNolteらを非難した。一方、前述のように「NATO 哲学」と言ったのはハーバーマスである。Nolteはそのどちらの命名にも反論しない。この引用の後の部分で彼が争うのは、ナチズムがあくまでボルシェヴィズムに対する反応であったという従来の主張についてのみである。

略)を怖れることは、以下の単純な疑問に目をつぶるということなのだ。すなわち、1953年、時の連邦首相がアーリントン軍人墓地訪問を拒否していたら、しかもそこにはドイツの民間人に対するテロ攻撃に参加した者たちも埋葬されているからという理由で拒否していたとしたらどうなっていたらろうか、という問いである。<sup>10)</sup>

1953年4月、アメリカのワシントンを訪問していた当時のアデナウアー首相はアーリントン軍人墓地を訪れ、大戦の犠牲者に対して献花を行ったが、それは紛れもなく、かつてアメリカの敵であったドイツが今では反共という共通の目標に向かって「合衆国の政治といかに歩調を合わせてきたか」<sup>11)</sup>を示すものであった。そのことを踏まえてこの引用を見るならば、1985年、レーガン大統領が武装親衛隊の兵士も埋葬されているビットブルクを訪問したこともまた、53年とはまったく逆の構図を用いて同じ目的を果たそうとしたものであり、53年当時アメリカと手をたずさえることを拒否することは到底不可能であったのと同じように、今回の訪問についても、拒否することは不可能であったと主張しているように読める。つまり、過去の罪の赦しは、アメリカの側に居続けることに付随するものであり、陣営を離れることなど考えられない以上、受け取ってしかるべき、あるいは受け取らざるを得ないものだとの見解が示されているということである。

このように解釈する限り、ノルテは間違いなくアメリカと共同歩調を取り新保守主義を喧伝する者の側にいる。しかし、ここで示されているかに見えるアメリカへの支持表明は、あくまで限定付きのものでしかない。

『フランクフルター・アルゲマイネ』の論説のもっとも重要な論点は、ナチズムも、その他あらゆる過去の事象と同等に扱われるべきであり、そのことによって初めて、歴史学という学問の研究対象となり得、よりナチズムの真の姿に迫ることができる、というものだが、それを阻害している要因について、ノルテは以下のように述べる。

今日、すべての人間が信条的には平和主義者であるが、にもかかわらず、ナチズムの好戦性を冷静に距離を置いて見ることができない。なぜなら、彼らは、2つの超大国が、1933年から1939年のヒトラーよりもはるかに多くの予算を、毎年毎年軍備に費やしていることを知っているからだ。そしてそこから来る強いもどかしさが、現在の混乱の中にある敵よりも、

10) Ernst Nolte: Vergangenheit, die nicht vergehen will. In: „Historikerstreit“. S. 42.

11) Der Spiegel. 16/1953 (15.04.1953). S. 5.

明らかな敵を弾劾する方に向かわせるのだ。<sup>12)</sup>

ナチズムをその他の過去と同等に扱えない原因は、アメリカとソ連にある。引用文の主張に従えば、本来、人々が弾劾したいのは、ヒトラーよりもはるかに多くの軍事費を使っている、この両国である。しかし、戦争責任を負わう西独が、軍事面において他国に口出しすることなど許されるはずはない。そこでその身代わりに攻撃されているのがナチズムだ、というわけである。つまり、ノルテにおいてアメリカとの関係はいつも、ナチズムの問題に対してどのような効果を発揮するかで評価されている。ナチズムの罪を<相殺>してくれるならば追従も許容されるが、そうでなければ批判の対象ともなり得るのである。

\*

アメリカへの態度が単なる追従でないのと同様、ノルテの共産主義への態度もまた、単なる反共の枠組みで括ることはできない。彼は、貨幣・流通経済といった近代的事象に抗して、前近代的な社会の再構築を目指した一連の試みの系譜の中にナチズムを位置づけようとするが、彼によれば、初期の共産主義者だけでなく、ロシア革命、ポル・ポトもその系譜に含まれる。さらに、こうした反近代の動きが歴史上多々試みられてきたという前提のもと、それらを「善意から生まれた、総じて共感ないしは理解可能な思考」<sup>13)</sup>に基づいており、「疑うべくもなく肯定的な役割を果たした」<sup>14)</sup>と評価している。

ハーバーマスはここにも痛烈な批判を浴びせている。彼は、フランクフルトで行われた講演『近代——未完のプロジェクト』において、伝統的に引き継がれてきた模範にただ従えばよいとする「誤った規範性」<sup>15)</sup>に抗うモダニズムの精神を評価したが、そうした立場は、「前近代的な社会の再構築」に好意的な目を向けるノルテとは明らかに相容れない。しかし、この点に関して注目すべき問題はそれだけではない。すでに述べたように、ノルテによれば、ロシア革命における階級抹殺は、他国の為政者に対して恐怖の念を起こさせるほど歴史上類を見ない残虐な行為であった。しかし、革命だけでなく、そこに至る一連の共産主義運動を、彼は「理解可能」であり「肯定的な役割を果たした」と評価する。共産主義運動がこのように評価されるのは、

12) Ernst Nolte: Vergangenheit, die nicht vergehen will. In: „Historikerstreit“. S. 40.

13) Ernst Nolte: Zwischen Geschichtslegende und Revisionismus? In: „Historikerstreit“. S. 26.

14) ibid.

15) Jürgen Habermas: Die Moderne — ein unvollendetes Projekt. In: Jürgen Habermas. Kleine Politische Schriften. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1981. S. 448.

何よりもナチズムをその系譜の中を含め、少なくとも思想上は——ユダヤ人の虐殺など、実際に行った行動は別として——「理解可能な」ものであると説明しようとする文脈においてである。つまり、ナチズムと並んで残虐なもの最たる例であった共産主義も、ナチズムが無害であることを証明する文脈の中では、やはり同様に「肯定的な」ものになる。 Nolte においては、アメリカあるいは共産主義いずれの場合でも、ナチズム論との関係によって、それらに対する距離はいかようにも変動するのである。

### 3

では、Nolteにとって、なぜそれほどまでにナチズムが重要なのだろうか。たしかに、歴史上の事象への彼のアプローチ手法そのものが、ナチズム擁護に向かう可能性を十分に持っていたことは事実である。Nolteは、彼の著者とも言える『ファシズムとその時代』(1963年)において、自らの研究手法を「現象学的 (phänomenologisch)」と名付け、その詳細を以下のように説明している。

(前略)たとえば、カトリック教会、中世の国家、フランスの国民国家、マルクス主義などは現象である。現象学はつまり、こうした現象が自己をいかなるものとして現すのかを理解することである。したがって、これは単に事の経過を確認的に叙述することとも、外から批判することとも区別される。<sup>16)</sup>

Nolteによれば、外からどのように見えるかというよりも、対象となる現象を担う人々が、自らをどのように理解し、どのように立ち回ろうとしたかが重要であり、そうした「現象学的」手法を用いることによって、ドイツやイタリアだけでなく、それ以外の国のファシズム運動にも理解の道を開くことができるのだという。<sup>17)</sup>しかし、自己理解に重きを置くこうした見方は、明らかに大きな危険をはらんでいる。『ファシズムとその時代』の3年後に出された『ファシズム運動』では、ヒトラーが仕掛けた二正面戦争が以下のように説明されている。

今やヒトラー、およびすぐさま彼に加わったファシズム勢力全体が、ボルシェヴィズムと民主主義——つまり自由な政党政治体制——という

16) Ernst Nolte: Der Faschismus in seiner Epoche. München (R. Piper & Co.) 1963. S. 53.

17) ibid. S. 54.

2つの巨大な敵と軍事的な戦いの渦中であつたのである。一方の側の共感を得、闘争を平和裡に進める可能性は存在しなかつた。<sup>18)</sup>

引用の最後の文は、断定した形で終わっているが、実際に「闘争を平和裡に進める可能性は存在しなかつた」かどうかではなく、ヒトラーおよびファシズム勢力がそう思っていたということを示している。歴史における「現象学的」手法は、ともすれば過去の人物の代弁者—— 度を超えれば場合によっては擁護者—— に墮してしまう危険がある。

しかし、このようにノルテの研究手法を問題とただけでは、ナチズムを取り上げた際になぜその代弁者となり得るのかについては説明できても、なぜ代弁される対象がナチズムでなければならないのかについては、説明することができない。以下、この問題について考えていくことにしよう。

先に、本来人々が弾劾したいのはヒトラーではなく2つの超大国であるというノルテの主張を見たが、彼によれば、このように本来非難すべきものを非難せずにその矛先をナチズムに向けるという行為は、現代のフェミニズムにも見出されるのだという。『フランクフルター・アルゲマイネ』の論説には以下のようにある。

似たようなことが、フェミニズムにも言える。ナチズムにおいて、＜男性性幻想 (Männlichkeitswahn)＞といったものはまだ、腹立たしいほどの自信にあふれていたが、現在においてそれは、自制し身を隠す傾向にある—— だから、ナチズムは、男性性幻想が最後に、かつ見紛うべくもない形で現れたものとして、目下の敵となるのである。<sup>19)</sup>

「自制し身を隠」しているということは、「男性性幻想」はいまだに存在するということであり、フェミニズムが本来闘うべきなのは、現在の「男性性幻想」である。しかし、2つの超大国の例と同様、本来の敵に向かわず、代わりに攻撃しやすいナチズムを槍玉に挙げているのである。ただし、現在の「男性性幻想」と闘うべきだというのは、フェミニズムに対して言うのであり、この引用の主眼はフェミニズム批判にある。後に明らかになるように、ノルテは「男性性幻想」自体の存在を否定しているわけではない——むしろ逆である—— 点に注意する必要がある。

これらのいわば欺瞞的手法を用い、ナチズムを不必要に攻撃することによ

18) Ernst Nolte: Die faschistischen Bewegungen. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1966. S. 170.

19) Ernst Nolte: Vergangenheit, die nicht vergehen will. In: „Historikerstreit“. S. 40.



って西独が目指すのは、西側ブロックと足並みを揃え、ともに「裕福な社会」になることである。しかし、そのためにますますナチズム像はゆがめられていくこととなる。

ドイツ連邦共和国と西側社会が、概して「裕福な社会 (Wohlstandsgesellschaft)」へと発展の方向を定めていくに従って、犠牲をもちとわかない軍人精神 (中略) のようなイデオロギーをもった第三帝国のイメージは、ますます奇妙なものとなる。<sup>20)</sup>

「裕福な社会」とは、1980年にミュンヘンで行われた講演 (「歴史伝説と修正主義のはざま?」) の際にノルテ自身が用いた「西側福祉社会 (die westliche Wohlfahrtsgesellschaft)」の言い換えである。<sup>21)</sup> 西独が2つの超大国の軍事費に目をつぶり、西側社会と歩調を合わせることによって——フェミニズムと「男性性幻想」については、ここではいったん脇に置いておく——ナチズムはいつまで経ってもドイツ人の足枷であり、学問的探求を許さない歴史上の異物であり続ける。ノルテはそのすべてを問題視し、拒否する。

\*

では、2つの超大国の軍事費はなぜ批判され、西側諸国と足並みを揃え「裕福な社会」を目指すことは、なぜ拒否されなければならないのだろうか。この問いについて考えるために、ノルテが2つの超大国の軍事予算について述べた引用 (注釈12) を再度参照してみよう。今回着目したいのは、ドイツ語を付した部分である。

今日、すべての人間が信条的には平和主義者であるが、にもかかわらず、ナチズムの好戦性を冷静に距離を置いて見ることができない。なぜなら、彼らは、2つの超大国が、1933年から1939年のヒトラーよりもはるかに多くの予算を、毎年毎年軍備に費やしていることを知っているからだ。そしてそこから来る強さもどかしさが、現在の混乱の中にある敵よりも、

---

20) *ibid.* S. 39.

21) 「第三帝国は、〈西側福祉社会〉と名付けられるものの視点からすると、たいていは、まさにグロテスクと言ってよいほどに古めかしい、反動的な印象を与えます。」(Ernst Nolte: *Zwischen Geschichtslegende und Revisionismus?* In: „Historikerstreit“. S. 14.) 現在の平和的な社会からすれば、ナチズムがより奇異に見えると言っており、注20の引用と全く同じ主張である。

明らかな敵を弾劾する方に向かわせるのだ (eine tiefe Unsicherheit, die den Feind lieber im Eindeutigen anklagt als in der Verwirrung der Gegenwart)。

ここでは、「弾劾する (anklagen)」という語がはっきり使われているだけでなく、2つの超大国が「敵 (Feind)」とまで言われている。この主張は荒唐無稽だと言わざるを得ない。なぜなら、超大国の1年間の軍事費が1933年から39年の間にヒトラーによって使われた軍事費よりも高いかどうかは、誰もが知っている常識とは到底言い難いからである。<sup>22)</sup>しかし、荒唐無稽ではあるが、なぜノルテが「敵」と言うのか、その理由を考察しなければならぬ。この少し後の文脈において、彼は以下のように言う。

連邦共和国が国際政治において、せいぜい中規模国家の役割 (Rolle) しか果たしえないことが判明するに従って、ヒトラーの<世界支配>という要求は、ますますとてつもないものを感じざるを得ない。<sup>23)</sup>

この引用では、「役割 (Rolle)」という語が使われていることが重要である。ノルテは、ドイツは本当は中規模国家ではないのに、中規模国家の役割しか負わせられないと言いたいのである。彼が、ナチズム像をゆがめている元凶として、西独が西側社会と足並みを揃えて推進する「裕福な社会」を名指していることはすでに見た。ここでは、それが「中規模国家」に置き換わっている。ノルテにとって、西側諸国と足並みを揃えて「裕福な社会」になっていくことは、国際政治において中規模国家になり下がっていくことと同義なのである。

西独には、ナチズムの時代と比してむしろ後退している部分がある。西独は確かに、西側ブロックに参入し、その価値観を取り入れることで平和で福祉的な国家となった。しかしそれと引き替えに、現行の世界秩序に挑戦するどころか、異議申し立てすら許されず、国家規模にふさわしい役割を与えられないままになっているのである。このように、彼の論説を西独の欠如が列挙されるテキストと捉え直すならば、さきほどいったん保留したフェミニズムに関して、突然その話題を持ち出したノルテのさらなる意図<sup>24)</sup>が自ずから明らかになってくる。彼は、フェミニズムが現在の「男性性幻想」を批判

22) 引用文3行目の「彼ら (sic)」は、1行目の「すべての人間 (alle Menschen)」を受けており、「すべての人間が知っている」と読むことができる。

23) Ernst Nolte: Vergangenheit, die nicht vergehen will. In: „Historikerstreit“. S. 40.

24) 前述のように、フェミニズムに言及した第1の意図は、ナチズムが不当に批判されている例を示すことであった。

すべきだと言っているのではない。むしろ、現代において「男性性」が自制し身を隠している——つまり、表面的には欠如している——ことが重要なのである。批判されるべきなのは、「男性性」をそのような状況に追いやっているフェミニズムの方である。西独の現状を表す言葉として、ここに新たに「男性性」の自制あるいは隠匿を加えることができよう。

ノルテが、ナチの行為をその残虐性ゆえに「アジア的」と形容していることはすでに見た。しかし彼によれば、ナチズムは、世界秩序の改編を目指す挑戦的志向やそれを下支えする好戦性、男性性といった、西欧の伝統とは相容れないものを所持していた。だとすれば、ノルテにとって「アジア的」なものには、否定と肯定、2つの側面があることになる。すなわち、凶暴性を帯びているという点では否定的、「世界支配」を志すほどの男性性を持ち合わせていたという点では肯定的である。

ヴィッパーマンは、「歴史家論争」とその10年後の「ゴールドハーゲン論争」(1996年)との比較を試みた著書の中で、いずれの論争においても共通して、ドイツの過去の行為を相対化し、それによって罪に対する弁明を行おうとする意志が存在していることを読み取っている。そうした人々が目指しているのは、過去に終止符を打ち、ドイツが再び大国のように振る舞うことである。<sup>25)</sup> ノルテも明らかに、ヴィッパーマンが徹底して批判の対象とするこの一団に含まれる。ノルテもまた、当時の西独の位置づけへの不満を表明しているからである。

しかし、ノルテの要求は西独の位置づけに留まらない。彼は、西独に「中規模国家の役割」しか付与しない世界秩序およびそれを支配・維持している勢力——主としてアメリカ——へも批判の矛先を向ける。<sup>26)</sup> この相違は重要である。なぜなら、前述のようにノルテは、ナチズムの世界秩序への挑戦を評価し、それこそが彼とナチズムを結びつけているものだからである。たしかに、彼の中に、ナチズムを理解・了解可能なものとしようとする欲望は確実に存在する。また、彼の側に立つ他の論客たち同様、敗戦の影を引きずったままではない新たなアイデンティティ形成を目指していることも事実である。しかし、ノルテにとって、そうしたアイデンティティ形成は、忌まわ

25) Wolfgang Wippermann: Wessen Schuld? Vom Historikerstreit zur Goldhagen-Kontroverse. Berlin (Elefanten Press) 1997. S. 9. u. S. 114.

26) レーゼは、新保守主義が反米的側面を持つ可能性について言及しているが、その目的を「〈国家としてのアイデンティティ〉を伴った〈自然で健全な生〉を新たなイデオロギーにまで高めるため」(Hartmut Reese: Protagonisten der „nationalen Identität“: die Nationalrevolutionäre. In: Frankfurter Hefte, Jg. 39 (1984), Heft 6, S. 15) としている。レーゼが想定しているのは、あくまで国家としてアイデンティティを1つにまとめ上げる手段としての反米的立場であり、現行の世界秩序批判ではない。

しい過去の修正のみによって行われるのではない。先に示したように、「似たようなことが、フェミニズムにも言える」のであり、今現在世界を支配している秩序の改編が必要なのである。ノルテは、たしかにナチズムのことを語ってはいるが、ナチズムだけを語っているわけではない。また、ナチズムの罪を精算しようと要求してはいるが、彼の要求はそれだけではない。ナチズムは、彼の認識するドイツ特有の問題が現れている一つの例に過ぎないからである。

#### 4

冒頭に述べたように、ノルテの主張は、既存の研究において主に冷戦構造の枠組みの中で理解されてきた。たしかに、「アウシュヴィッツより、<収容所群島>の方が先」であったというような主張や、1980年の講演（「歴史伝説と修正主義のはざま？」）でも、今日なおベトナムやアフガニスタン、あるいはカンボジアで虐殺が繰り返されているといった発言をしていることに鑑みれば、ノルテは西側の反共イデオロギーの代弁者のように見える。本論においても、そうした側面があることは否定しない。しかし、ノルテのナチズムへの親近感は、当時の西独の位置づけへの不満と連動しており、ナチズムの過小評価は、ボルシェヴィズムを用いた同時代的な「横」の比較だけでなく、時代を越えた「縦」の比較によっても生じていた。したがって、ノルテの例から分かるのは、反共的姿勢がそのまま直線的にナチズム擁護につながるわけではないということである。

ところで、ハーバーマスはノルテが問題視した西独の位置づけについてどのような見解を持っていたのだろうか。1987年、「歴史家論争」における自らの立場を改めて説明した論説において、ハーバーマスは、戦後西独が西側陣営となり、さらにそれがイデオロギー的にも下支えされてきた要因として反全体主義を挙げ、以下のように言う。

二重の反全体主義コンセンサスが、60年代に至るまで、私たちの政治文化的メンタリティの背景を規定してきた。<sup>27)</sup>

「二重の反全体主義」とは、ナチズムおよび共産主義という2つの全体主義体制への拒否を指す。これが西独が西側陣営に留まり続けることを良しとしてきた第1の要因である。しかし、ここに経済発展も大きな影響を与えて

27) Jürgen Habermas: Geschichtsbewusstsein und posttraditionale Identität. Die Westorientierung der Bundesrepublik. In: Zeitdiagnosen. Zwölf Essays. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2003. S. 120.

いることを、ハーバーマスは隠さない。

もちろん、経済的成功と——こちらの方が重要度を増しているが——社会福祉国家によって成し遂げられてきた成果が、暗黙の説得力として、ともかく開始されたプロセス（Prozessen, die sich ohnehin anbahnten）に賛意を表するいちばんの根拠となっていた。<sup>28)</sup>

ハーバーマスの力点は、明らかに、理由はどうあれ西側に同調してきたことにある。西側志向は、とにかくまず始められ、経済発展や冷戦といった時代の流れに後押しされ、徐々にその存在意義が付与されていったものなのである。戦後の西独の歩みをそのように捉えるためには、時代の流れの不可逆性に同意すると同時に、現行の——すなわち、第2次大戦の結果として生まれた2つの超大国による——世界秩序の変更不可能性を承認し、不問に付さなければならない。なぜなら、西独のプロセスを「ともかく開始」させたのは、まさにその世界秩序だからである。

\*

ノルテとハーバーマスのナチズムに対する捉え方の相違は、冷戦構造下においてドイツ人としてのアイデンティティをどこに見出すかの差——ノルテは第2次大戦前まで脈々と受け継がれてきた伝統、ハーバーマスは大戦後新たに獲得した民主的枠組み——に還元されがちである。しかし両者とも、視野の中心に見据えていたのは、西独の現状である。ノルテは現状の変更を希求するがゆえにナチズムに親近感を抱き、ハーバーマスは現状の変更不可能性を認識しているがゆえに、そうした感情を持つことを拒否する。したがって、アイデンティティをどこに見出すかという問題は単独では議論し得ず、西独を取り巻く現状へのスタンスとたえず不可分のものであり、いずれもナチズムをいかに捉えるかを規定する大きな決定因として見逃すことはできない。すでに述べたように、二超大国が支配する現状の変更を望むノルテは、ナチズムが、現状を打破し世界を支配することを目標に掲げた点に親近感を抱いていた。

論争から年数が経過するにつれて、研究論文の数は大きく減少している。しかし、時間的な隔たりが生じたからこそ、今度は各論者の立場のみでなく、当時の西独の姿をより総体的に捉える試みが可能になる。とすれば、歴史家論争を研究の俎上に載せる意義は、いまだ失われていないと言えるだろう。

---

28) *ibid.* S. 121.

## Der asiatische, bellizistische, männliche Nationalsozialismus

— „Historikerstreit“, aus einem neuen Blickwinkel —

Masanao WATANABE

Den „Historikerstreit“ (1986) hat man bisher viel diskutiert. Dabei hat man hauptsächlich versucht, festzustellen, auf welchem gedanklichen Standort die Disputanten seien, indem man die Aufmerksamkeit auf ihre Identität richtete. Aber damit wurden die Inhalte der Behauptungen an sich noch nicht genug analysiert und infolgedessen wurden einige Probleme, die sie haben, übersehen.

Um diese Probleme ans Licht zu bringen, fasst die vorliegende Arbeit das Wort „asiatisch“, so nennt Nolte sowohl den Nationalsozialismus, als auch den Kommunismus, ins Auge. Diese Terminologie ist problematisch, weil Hitler das Wort nur auf seine Feinde, z.B. Kommunisten bzw. Juden anwandte und nicht auf sich selbst.

Habermas reagierte kritisch auf Noltens Argumentation. Er nannte Noltens Behauptungen „Natophilosophie“ und erklärte dessen Absicht folgendermaßen: Dieser wolle die nationalsozialistische Vergangenheit verharmlosen, indem er Westdeutschland, das als NATO-Mitgliedsstaat mit den USA und anderen westlichen Staaten gegen den Kommunismus kämpft, beisteht. Das sei ein typischer neokonservativer Standpunkt. In Noltens Behauptungen gibt es jedoch Widersprüche, die man im Rahmen eines neokonservativen Ansatzes nicht fassen kann: Er will den Nationalsozialismus herunterspielen, obwohl er ihn „asiatisch“, gemeint ist barbarisch, nennt. Würde er die Taten der Nationalsozialisten tatsächlich verharmlosen, so müsste er sie als harmlos, oder wie durch Helmut Kohls und Ronald Reagans Besuch der Kriegsgräberstätte in Bitburg beabsichtigt, als überwunden erklären. Warum bezeichnete Nolte also den Nationalsozialismus als „asiatisch“?

Bei Nolte hat das Wort „asiatisch“ zwei Seiten: Eine Positive und eine Negative. Solange es auf die Brutalität, mit der die Nationalsozialisten viele Menschen getötet haben, verweist, ist es natürlich negativ. Solange man aber überlegt, dass die nationalsozialistische Regierung darauf abzielte, den ganzen europäischen Kontinent zu beherrschen („Weltherrschaft“), ist es positiv: Nolte will die Stellung von Westdeutschland innerhalb der NATO nicht unterstützen, sondern im Gegenteil kritisieren. Er behauptet in einem Zeitungsbeitrag (1986): Das Bild, dass der Anspruch Hitlers auf „Weltherrschaft“ ungeheuerlich ist, sei darauf zurückzuführen, dass dem jetzigen Westdeutschland nur die Rolle eines Staates von mittlerer Größenordnung

zugeteilt wird. Das heißt, wenn Westdeutschland eine noch größere Rolle übernehme, müsse sich der Anspruch Hitlers auf „Weltherrschaft“ NICHT ungeheuerlich ausnehmen. Problematisch bei Nolte ist nicht der Nationalsozialismus, sondern die damalige Weltordnung und die sie vertretenden zwei Supermächte, bes. die USA, die auf Westdeutschland einen großen Einfluss haben. In demselben Beitrag wird seine Kritik an ihren gigantischen Militärausgaben angedeutet.

Habermas übte an Nolte heftige Kritik, aber die Standorte der beiden Disputanten in Bezug auf die damalige Weltordnung und die Rolle Westdeutschlands sind voneinander nicht so weit entfernt. 1987 äußerte Habermas seine Ansicht darüber folgendermaßen: Die Westorientierung von Westdeutschland sei nach dem zweiten Weltkrieg zwar von außen (d.h. nicht von sich selbst) angewiesen worden, aber sie habe allmählich ihren Wert gewonnen, indem Westdeutschland sich unter dieser Ordnung sowohl wirtschaftlich als auch politisch und sozial entwickelt habe. Für Westdeutschland ist die Westorientierung nicht das Beste, dennoch würde die Verneinung der bestehenden Weltordnung die Verneinung aller dieser Erfolge bedeuten. Habermas reagierte nicht direkt auf Noltens Kritik an den Supermächten, aber eben dieses Nicht-in-Frage-stellen könnte seine Antwort sein. Hier findet man die Gemeinsamkeiten der beiden Seiten, die man nicht durch Aspekte wie Identität und Kalkriegsschema, sondern durch einen Neuen wie „asiatisch“ fassen kann.